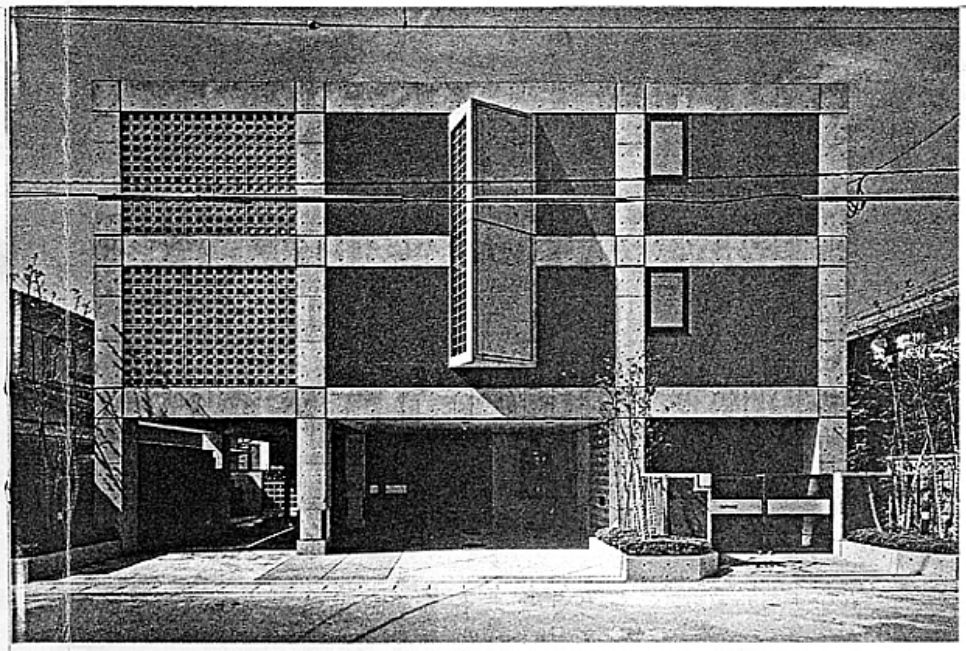
有孔ブロックの家 1989

連載 イマどきの家—126

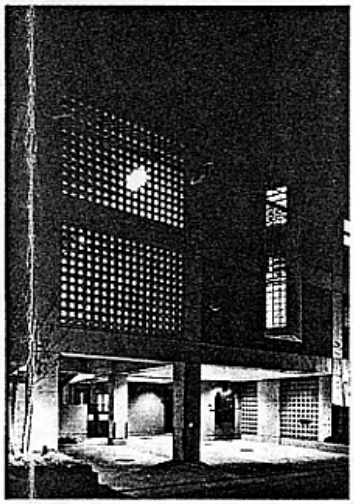
中空のデッキを有孔ガラスブロックで囲い 外部に開閉半ばさせた医院併用住宅

●徳島県鳴門市・M氏邸
●設計・富田真二

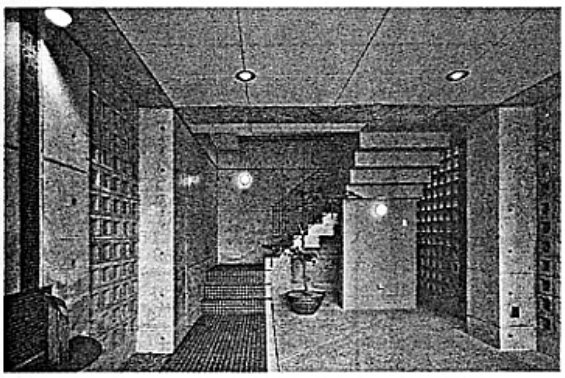
写真・文 大竹静市郎



▲北東道路側ファサード　コンクリートフレームが強調されたいかにもラーメン構造らしい外観　左手2・3階は有孔ブロックで覆ってある



◀有孔ブロックで覆われた北東側の夕景　内部の明かりがすき間から漏れて妙味ある光のパターンを描いている　右手ガラスブロックもいい



▲門扉から車庫とアプローチ越しに奥にとられた住宅への階段を見る　ここも両側に有孔ブロックを配して通風をはかっている

●医院と住宅との公私分離を図る

どの町でも医者や弁護士の家というと、いかにもそれらしく構えた豪邸というイメージが浮かぶ。それらは概して人を拒絶するような、いわば防弾トーチカ型の外観になりがちである。本当は地域に密着した親しみの持てるものにしなければならないのに、まるで反対の家づくりが行われてきたことになる。

今週紹介する鳴門の院長宅は、こういった歪んだ既成概念を変革しようという試みが見られるのでとりあげてみた。

建主のM氏(47)は外科医で、これまで敷地の南西側にある5階建ての併用住宅に、夫人(42)と長女(15)、長男(10)とで最上階の居宅部分で暮らしてきた。開業後10余年して外来診療部門が手狭になったので、それの拡充を図るために医院の管理部門と居宅とを一体にした別棟を建設する計画を立てた。

設計者に起用された富田真二氏は、独立前スタッフとして分院の設計を担当したことがあり、お互いに気心をよく知っていることから思うところをぶつけ合うにふさわしいと考えたのである。というのは、ふつう医院併用住宅は最上階に居宅をとるのだが、この入院患者の上での生活は想像以上に心身を蝕まれることを、これまでの生活で体感させられた。今度の建築ではそれにピリオドを打つこと、つまり心身ともに公私分離を実現することが、設計上の最大テーマとして浮かび上がってきたのである。近年、建築ジャーナリズムから注目を集めている徳島県の建築家グループの幹事役ともいえる富田氏は、その誠実な人柄といい、専門分野から高く評価されている力量からしても、新しい医院併用住宅のあり方をともに考えるにはふさわしい人材だった。それにしても医院スペースの占める割合がかなりあり、それと居宅とをどうひとつの建物の中で結合させ、かつ独立性を持たせるかが設計者に課せられたポイントとなった。

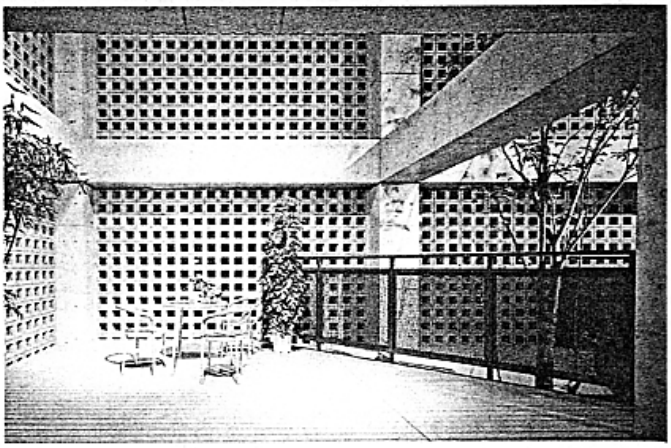
●バンチの利いた外部とエレガントな住空間

敷地はJR鳴門線鳴門駅から北東へ0.7キロ程のところにある。北東道路側から見ると、いかにもラーメン構造らしいコンクリートフレームが強調された、1階がピロティの堂々とした建物だ。2、3階の中央に斜めに突き出たガラスブロックの採光窓が設けられ、正面左手と南側の2、3階が有孔ブロックで覆われた外観からはとても住宅という感じはしない。全体的にクローズした印象だが、建築的で金満ぶりが表に現

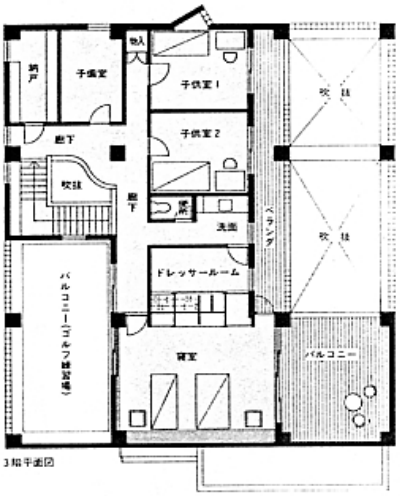
◀2階の玄関は白壁と木質が程よく対比した内部を象徴する空間　トップライトからの光がはじける明るい階段も心地よい

REATE HOUSE

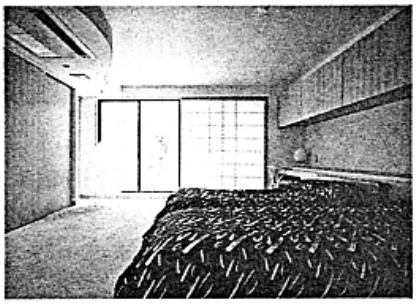
▶食堂はシンプルな照明とシャープなデザインのテーブル　椅子による品格のある空間だ　右手の厨房とは中高壁で仕切られている



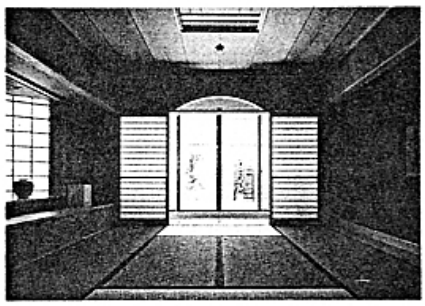
▲2階レベルに張り出したデッキの夕景　ここは有孔ブロックで囲われた半透視空間だが　室内につづけて戸外ライフが楽しめるスペース



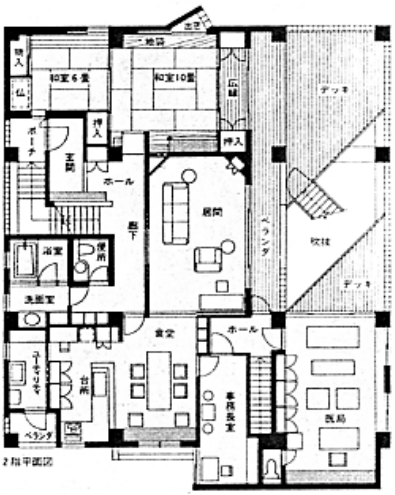
3階平面図



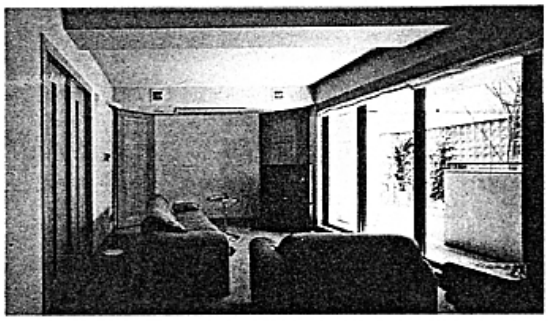
▶3階の寝室は10畳はあるゆったりしたスペース　障子によって和風の趣を感じさせるが　エアコンを納めたアール状の天井は現代調



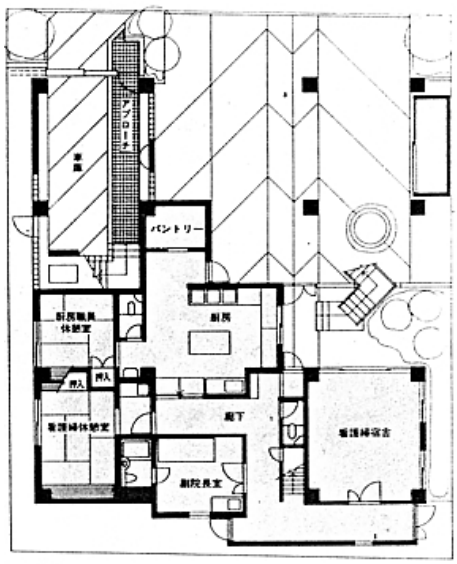
▲ふた間つづきの和室を開口部に向けて　三日月型の欄間がファッショナブルな雰囲気をかもしている　向こうのデッキには直接出られる



2階平面図



▲居間はこぢんまりした落ち着いたスペースでコーナーにエレガントな木調のデザインが施されている　屋外のデッキとのつながりがスムーズ



1階平面図

●所 在 地　徳島県鳴門市
●家族構成　夫婦＋子供２人
●設　　計　富田建築設計室・富田真二
●施　　工　西松建設(株)
●竣　　工　1989年８月
●敷地面積　347.9㎡(105.24坪)
●延床面積　493.88㎡(149.4坪)
　　１階　196.1㎡(59.32坪)
　　２階　181.27㎡(54.83坪)
　　３階　116.51㎡(35.24坪)
●構造規模　鉄筋コンクリート造３階建て

れていないのは救いである。住宅へは右手からアクセスする。ガレージと一体のアプローチはずい分長くとってある。最奥部のU字型の階段を上がり玄関に入ると、それまで目のあたりにしていたコンクリートや有孔ブロックのハードな質感から一転して、白壁と木質が心地よく対比した優しい空間に包み込まれる。それは各部屋にも共通していえることで、抑えの利いたエレガンスの感じられるインテリアが展開しているのに驚かされる。それは家具や照明器具のアッセンブリーにも反映して、センスのよい落ち着いた空間構成の要素となっている。

1階の医院スペースと、2、3階の居宅との視線を絶つために、2階に中空デッキを大きく張り出し、あたかも接地住宅的なスタイルとしたこともこの家の特徴である。デッキの一部は吹き抜けていて、植栽でうるおいを持たせているが、まわりを全面有孔ブロックで覆うことにより、壁面として機能させながら通風と採光をもたらしている。これは外部へ接する姿勢としても、決して閉じてはいないが自らのプライバシーは適度に保つといった、これからのライフスタイルのあり方についての提案となっているようである。

とみた・しんじ

1948年徳島県生まれ　'73年日本大学生産工学部建築工学科卒業　永大産業(株)勤務　一時渡辺優デザイン事務所へ出向　森田建築設計事務所を経て'83年富田建築設計室を開設して現在に至る　新日本建築家協会会員　'87年徳島県優秀建築コンクール優秀賞受賞　オーソドックスな手法をベースに近年の建築の流れを巧みに取り入れた作風は独特の格調を感じさせる
TEL　0886(55)3885